２０２４年３月２４日（日）　　於札幌発寒教会

神の指

（ルカによる福音１１：１４～２３、イザヤ書４９：２２～２６）

今朝は、ルカによる福音書１１章１４節から２３節までの、私たちが現在礼拝で用いている新共同訳聖書では、「ベルゼブル論争」と言う小見出しがついた個所が、説教のテキストになります。ここは、こう書き出されています。「イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した」。悪霊などと言うと、現代人は、忽ち、拒絶反応を起こし、そんなものは古代人の非科学的な妄想に基づく話で、悪霊の存在など、根拠のない迷信に過ぎず、今では全く聞くに値しない話だ、と、固く心を閉ざしてしまいます。でも、これを書いているのはルカで、彼は、福音書記者である前に、先ず、医者でした。と言うことは、彼は科学者で、当時の社会では、最高のインテリの一人だった、と言うことです。彼は、パウロの伝道に、終始同行したのですが、その主な任務は。持病を持ったパウロの主治医であった、と、そう考えられます。彼は、医者として、人が患っている病気を診て、治せるものは治し、改善できるものは改善したはずです。でも、中には、どんな医者でも、手の施しようのない難病、奇病もあったでしょう。それは、今日とて同じことです。そうした病は、恐らく、その多くは、精神や神経が冒された、所謂、心の病、即ち、心因性の病、と言って間違いないと思われます。当時のユダヤでは、これを悪霊の仕業と見做したのです。でも、主イエスには、現に苦しんでいる者を前にして、それが迷信であるとか、ないとか、論じる暇はありません。何より、癒すことが先決です。主イエスは、現実は現実として受け止め、苦しむ者を一刻も早く解放すべく、直ちに、行動されたのです。この場合の癒しの対象は、口の利けない人でした。

私は、酷い吃音だった人が、話せるようになったばかりか、雄弁にさえなった実例を知っています。恐らく、何かが切っ掛けで、心がほぐれ、その結果、口もほぐれたものと想像されます。キリストの愛に触れて、口の利けなかった人が、口が利けるようになったと言うことは、それから考えても、大いに起こり得ることで、主イエスならば、それは当然のこと、とさえ言ってよいのではないでしょうか。兎に角、主イエスは、ここで、人の心を縛りつけて、口を利けなくさせていた悪霊を追い出されたのです。群衆はこれを見て、大いに驚嘆しました。目の前で起こっていることを、何の偏見も持たずに、素直に見れば、驚嘆する外、なかったはずだと思うのですが、しかし、何時の時代、どこの国にも、根性の曲がった、ひねくれ者はいるのです。確かに、悪意をもって見れば、白も黒に見えるのです。敢えて、歪んだ目をもって見ようとすれば、誰が見ても、間違いなく、真っ直ぐなものでも、歪んで見えるのです。

それら“ひねくれ者”の内、或る者は、こう言いました。「あの男（つまり、イエス）は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と。また、或る者は、イエスを試そうとして、天からのしるしを求めました。最初に出て来た、ひねくれ者の難癖は、全く理屈にならない理屈です。彼らの論理は最初から破綻しています。彼らは、主イエスがなさった素晴らしい奇跡は、一応奇跡として認めはするのですが、その解釈が、実に、揮っているのです。何と彼らは、その奇跡を惹き起こしたのは悪霊の親分、ベルゼブルであって、主イエスは、このベルゼブルの力を借りて悪霊を追い出したのだ、と、そう言うのです。口の利けない人に取りついて、口を利けなくしたのは悪霊なのです。その親分は、ベルゼ

ブルなのですから、子分である悪霊は親分であるベルゼブルの意に反することなどできるわけがありません。すべては、彼、悪霊のお頭・ベルゼブルの指示から出ているのです。元々子分の悪霊を使って、口を利けなくさせたのに、そのことを忘れて、折角の子分の働きを帳消しにしてしまうような振る舞い、つまり、口が利けるようにしてやる、などと言うことを、一体全体、親分のベルゼブルがやると、本当に考えるのか。もし、そう考えるとすれば、それは正気の沙汰ではない、と言うのが、主イエスの反論なのです。何故なら、それでは、悪霊の世界で、内輪もめが起こるのは必定で、自ら自らの身に滅びを引き寄せるだけのことにしかならないからだ、と、主イエスは断固言い放たれるのです。

それと共に、こうも言われました。「わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたがたの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたがたを裁く者となる」と。悪霊を追い出す、と言う治療行為は、主イエスだけがなさったことではなく、広く民間でも行われていたことだったのです。当然、彼らにも、上手い下手があったでしょうが、兎に角、そうした行為は、決して珍しいことではなかったのです。主イエスに対して、「彼は、悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と、非難する者らは、彼らの仲間たちの同じ行為に対しては、何と言うのか。同じように、彼らも、ベルゼブルの力で、それをやっているのだ、と言うとしたら、恐らく彼らは、黙ってはいまい。猛烈に反発し、激しく反論することは言うに及ばず、暴力をもってさえ、反撃をするのではないか。そうなることを承知で、あなた方は、そんな軽口をたたいているのか。あなたがたが今口にしていることは、そのような危険を、自らの身に招きかねないことなのだよ、と、主イエスは、そう言って、彼らを諭し、窘（たしな）めておられるのです。

他方、主イエスに対し、天からのしるしを求める者は、悪霊を追い出す、と言うことは、何も特別なことではない。外にも、同じことをやっている者は、沢山いるではないか。だから、それだけでは、お前を特別な“神の人”とは認め得ない。もし、認めてほしければ、天空に特別な現象を引き起こして見せるなど、普通ではない、我々がアッと驚くような奇跡を行って見せよ、と、密かに主イエスに迫ったのです。密かではあっても、主イエスには、すべてはお見通しですから、口に出すも、出さぬも、結局は同じことで、主イエスは、その者たちに対して、２０節で、こう言われました。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」と。神の国とは、神の愛の御支配のことです。それは、主イエスのこの世への到来によって開始されました。確かに、開始されはしましたが、今は、まだ完成に至るその過程です。あくまでも、その完成は未来に待たねばなりません。でも、既に、開始されたことは、紛れもない事実なのです。主イエスが、悪霊を追い出されるのは、こうした事実を世に示すためであって、主イエスにとっては、悪霊を追い出す行為は、外でもない、神の国到来の“しるし”、証明、証拠なのです。それこそが、“しるし”、証明、証拠なのですから、更に、それを証明するものなど、外にないのは当然です。そこに、神の指の業を見、既に、神の愛の御支配が始まっていることを見ない者は、結局は、他のどこにも、それを見ることはできないのです。主イエスを前にして、どこまでも、お前が神の子だと言うことを証明して見せろ、と迫っても、主イエス以上の権威などないのですから、証明のしようがないのです。もし、できたとすれば、証明した、そのものが権威となるわけで、主イエスは、そのもののお墨付きをもらって、初めて権威ある者とされることになり、その結果、何が起こるかと言うと、主イエスにお墨付きを与えたものこそが、真の権威者になるのであって、主イエスは、ナンバー・ツーにはなり得ても、最早、真の権威者ではなくなってしまうのです。と言う訳で、主イエスのお答えは、詭弁でも、遁辞でもなく、実に、筋の通った真っ当な答えなのです。

ここで、「神の指」について、少し考察をしておきたいと思います。旧約聖書で、「神の指」が最初に登場するのは、出エジプト記８章１５節です。モーセは神の命を受けて、エジプトの王・ファラオと、イスラエルの民の解放を求め、幾度も交渉を繰り返すのですが、頑として聞き入れないファラオに「うん」と言わせるため、神はモーセを通して、エジプト全土に、次々と災いを送られるのですが、エジプトの魔術師にも、ある所までは同じことができました。しかし、第３回目あたりから、最早お手上げになり、エジプトの魔術師自身も、遂に、モーセには神が働いておられることを認めざるを得なくなり、それをファラオにも告げるのです。その時、彼らが口にしたのが、先に挙げた箇所に出て来た、「これは神の指の働きでございます」と言う言葉だったのです。次は、申命記９章１０節で、そこでは、二枚の石の板に刻まれ、モーセに授けられた十戒は、「神の指で記された」もの、と言われています。もう一つ、忘れてならないのが、詩編８編３節の言葉です。そこにはこう述べられています。「わたしは、あなたの指のわざなる天を見、あなたが設けられた月と星とを見て思います。云々」（口語訳）と。エジプトに、１０度（たび）に亘り災いを下し、遂に、岩のように頑固だったファラオの心を砕いたのは神の指だったのですが、何と、詩編では、天すらも神の指の業だと言うのです。指の業とは、まるで蟻でもつまむような、或いは、折り紙でも折るような、そんな感じです。神にしてみれば、頑なファラオの心を砕くことも、天空や天体を生み出すことも、その程度のことにしか過ぎない、と言うことなのです。

では、新約ではどうでしょうか。ここでは主イエスの指に注目したいと思います。主イエスの指が際立った形で出て来るのがヨハネによる福音書８章６節です。姦通の現場で捕えられ、主イエスに裁かせようと、彼の許に引き立てられ、群衆の晒し者になっていた女性を救うべく、主イエスはしゃがんで、指で地面に何かを書き始められました。人々は、何を主エスが地面に書いておられるのか、一瞬関心は、主イエスの指に集ったことでしょう。それまで彼女に注がれていた、射るような、冷ややかな群衆の目は、この時、一人でに、彼女から離れたのです。恐らく、彼女も、それを直に肌で感じ取ったに違いありません。今にも彼女を石打の刑にしようと、いきり立っていた群衆は、主イエスに、「あなたがたの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」（７節）と言われ、さすがに彼らも、良心が疼（うず）いたのか、一人また一人と、その場を立ち去り、最後には、彼女と主イエスの二人だけが残されました。そして、主イエスもまた、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい」と言われました。しかし、その際、「これからは、もう罪を犯してはならない」と言う言葉を、付け加えることは、忘れられませんでした。それがなければ、罪は野放しにされかねないからです。それは兎も角、主イエスは、御自身の指をもって彼女を、群衆の鋭い裁きの目から救い出し、最終的には、真の赦しを与え、罪からも解放してあげたのです。彼女も悪霊に捕らわれていた一人だったのです。主イエスの指は、単に、奇跡をもたらすだけの、力ある指に留まらず、何よりも、解放を、赦しを、病める者、苦しめる者にもたらす、愛の指だったのです。

本論に立ち戻りたいと思います。２１節以下を読みます。「強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である。しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武具をすべて奪い取り、分捕り品を分配する」。主イエスは、これをもって何を言おうとされたのか、と言うと、今、目の前で起こっていることは、神と悪霊との戦い、主イエスと悪霊の親玉・ベルゼブルとの戦いなのだ、と言うことなのです。先の強い者とはベルゼブルのことです。でも、主イエスは、彼よりももっと強い者で、彼を襲い、武具を奪い取り、無力とし、分捕り品、即ち、彼の虜（とりこ）になっていた人々

を奪還し、解放し、自由の身とさせるのだ、と言うのです。今、現に、目の前で起こっている口の利けない人が、口が利けるようになった、と言うことは、正しく、そのことで、主イエスが、悪霊に、その頭・ベルゼブルに、勝利した何よりの“しるし”だ、と、そう言われるのです。だとすれば、伝道とは、悪霊との戦いであって、悪霊に捕らわれている人々を奪還し、神の手に移し返すこと、神の国、神の愛の御支配の中で生きる者とさせること、それ以外ではないのです。苦しみの中にある、捕らわれ人の奪還は、一刻の猶予も許されないのです。正に、一刻を争うことなのです。

だから、最後に主イエスは、こう言われます。「わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている」と。主イエスは、この時、戦っておられたのです。戦っている者にとって、温かい目で見守ったり、「頑張れ！」と、声援を送ったり、味方している“しるし”に何か品物を送ったり、と言うことも、嬉しいことではありますが、何より嬉しいのは、一緒に戦ってくれることです。況してや、この際、中立と言うことは、相手を利するだけで、敵になることと同じことです。そこで、主イエスは、羊を集めることに例をとって、「わたしと一緒に集めない者は散らしている」と、言われたのです。たとい、わざわざ羊を散らそうとしなくても、放っておけば、羊は、一人でに散って行くのです。羊を集めるには、大変な苦労がいるのです。その場合、一緒に集めてくれる者がいたら、どんなに心強いことか、主イエスは、身近に羊飼いを見て、羊の習性については、よくご存知だったのです。

主イエスに救い出され、自由を得た者は、ただ、それを喜び、感謝するだけでなく、直ちに、その悪霊との戦い、即ち、伝道の戦列に加わり、実際に、兵士として戦うことを、主イエスは、切に求めておられるのです。この際、中立などと言うことはあり得ないのです。それは、敵に加勢し、主イエスの足を引っ張ることにしかならないからです。

主イエスの思いを知った今、私たち、主イエスの霊の戦いの戦列に加わり、神の国、神の愛の御支配を拡大すべく、ささやかでも、主のお役に立つ戦士でありたく思います。

（三輪恭嗣）